

健康ビジネスサミット「うおぬま会議 2011」参加報告書



新潟県南魚沼市で開催された「健康ビジネスサミットうおぬま会議 2011」に参加してきました。

「健康ビジネスサミットうおぬま会議 2011」ホームページ

<http://www.kenko-biz.jp/uonuma2011/>

うおぬま会議は、新潟県が健康・福祉・医療関連分野で産業振興を図る目的で平成 18 年より始めた「健康ビジネス連峰政策」という施策の一つで、本年度で 4 回目の開催となります。

4 回目の開催となる今年度は、『健康・福祉・医療とまちづくり』を開催テーマとし、全体会議の基調講演に東京大学大学院経済学研究科教授の伊藤 元重（いとうもとしげ）氏を迎えたほか、健康ビジネスに関する 9 つの個別会議を合同開催しました。

<全体会議で挨拶する泉田新潟県知事>



オープニングでは、泉田県知事が挨拶し県として今後とも健康ビジネスを支援していくことを強調していました。

会議は全体会議と個別会議に分かれており、個別会議については参加者が自由に選択できる仕組みになっていました。

全体会議の基調講演は、総合研究機構(NIRA)理事長で東京大学大学院教授の伊藤元重氏が「日本の社会の未来における医療」というテーマで、日本の医療を経済学者という視点で分析していました。

<個別会議「機能性を有する食品の普及による健康社会実験プロジェクト」>



個別会議としては、2日間で「カロリーの質を考えようゆっくり吸収スローカロリー会議」、「ライスバレーの実現を目指して」や「機能性を有する食品の普及による健康社会実験プロジェクト」に出席しました。

「機能性を有する食品の普及による健康社会実験プロジェクト」では、パネラーとしてアミノアップ化学の三浦氏が出席し、北海道バイオ工業会の健康ビジネスに対する取組み等について発表していました。

<まとめ>

新潟県は、地域の企業や団体等の組織が連携して取組む「健康ビジネス」に関連する事業に対して平成22年度で21件3.2億円を補助金として支援するなど、健康・医療・福祉に係るビジネスを活発化することで県内産業の振興を図ろうとしています。

バイオ業界について北海道と新潟県を比べた場合、素材の豊富さと集積している企業数を比較すると、北海道のポテンシャルの方が勝っているのではないかと思います。ただ、行政のサポート体制及び支援という点については、支援制度を見ても圧倒的に北海道より新潟県が勝っており、今後、北海道に対して道内バイオ業界に対するサポートを一段と強化するよう要望していくことが必要と感じました。

また、余談ですが2日間の滞在の間、食事に魚沼産のコシヒカリ米を食しましたが、北海道米が全く遜色ないことが改めて実感しました。新潟米は、戦前は不味い米の代名詞と言われていたようで、理由は低湿地地帯であるために1年中田んぼから水が

引かず、刈入れ時も水に浸かったまま刈入れをしていたようで、戦後巨大な排水機場の建設により乾田化に成功し田園地帯が形成されたようです。

乾田化と肥培管理(適正な施肥技術と水管理)の技術向上を図ったことにより、現在の味の良いコシヒカリ米が誕生したとのことで、北海道米の食味がこれほど向上したのは、米に関わった人達が品種改良や栽培技術の向上を粘り強く実施してきたからであり、改めて改良に対する継続した取組みが大事であることを感じました。

以上